

慢性呼吸不全に対するNPPV使用患者のQOL評価

京都大学大学院医学研究科 呼吸管理睡眠制御学講座

○小賀 徹 陳 和夫

近年、患者側の視点に立ったアウトカムとしてQOLを評価することが重視されている。COPDの国際的ガイドラインであるGOLDにおいても、QOLの改善は治療管理目標の一つに挙げられる。在宅NPPV療法は、特に慢性II型呼吸不全患者において広く実施されているが、治療は困難で、このような慢性重症患者においては、QOL評価は極めて重要かつ有効である。QOLは、疾患による日常生活や健康への影響を定量化し、正当化された質問票を尺度として評価する。評価尺度は、「包括的尺度」と「疾患特異的尺度」に大別されるが、疾患が限定されている場合、より疾患に特徴的な症状や身体問題を主に構成される後者が使用される傾向にある。特にCOPDではSt. George's Respiratory Questionnaire(1992)、Chronic Respiratory Disease Questionnaire(1987)が開発され、日本語版も作成され、現在も頻用される。しかし慢性呼吸不全患者においては、基礎疾患はCOPD以外に様々であり、重症患者が多く、共通した健康障害をもつことから、これらの患者に特異的なMaugeri Respiratory Failure質問票(1999)が開発され、さらにNPPV使用患者を対象にSevere Respiratory Insufficiency(SRI)質問票(2003)が開発された。今回私たちは、SRI質問票の日本語版を作成し、その機能を検証した。特に、多施設共同研究により、前向きにNPPV使用中の慢性呼吸不全患者における予後因子解析をQOLを含めて実施したので、その知見もあわせて紹介したい。